

第3章 水文化と森林文化の融合による 地域活性化のあり方の検討

1. 検討方法

本章ではこれまで行ってきた水文化に関する事例調査及びモデル事例調査をふまえ、水のみならず水源地を形成する森林へと視野を広げることにより、全国の水源地域に共通して豊富に存在する「水と森林」の文化の融合をテーマに、これら二つの文化について見つめなおし新たな地域資源として再発見するための方策や地域特性を活かした地域資源の総合的な活用のあり方について検討した。

水文化と森林文化の融合による地域資源を活用した水源地域の活性化について考えるにあたり、国土交通省及び林野庁のそれぞれの調査でご協力いただいている専門家等による意見交換会を平成16年3月に実施した。この意見交換会の論旨にもとづき、事務局が水文化と森林文化の融合による地域資源を活用した水源地域活性化のあり方について取りまとめた。

意見交換会の概要は以下のとおりである。

(1) 意見交換会の実施概要

1) 主旨

本意見交換会は、全国の水源地域に共通して豊富に存在する水と森林及びその産物などを新たな地域資源として再発見するための方策や地域特性を活かした地域資源の総合的な活用策についての検討に資することを目的として実施した。

2) 開催日時 : 平成16年3月31日(水) 13:30~15:30

3) 開催場所 : 霞山会館

4) 出席者 : 学識経験者、民間研究機関、行政等(計13名 内、2名欠席)
(序章 p9~10の表2、3、4を参照)

(2) 意見交換会の検討内容

以下の内容を主なテーマとして意見交換を行った。

- ・ 水文化と森林文化の相違点とは
- ・ 人と水源地と森との深いつながり
- ・ 水に対する住民意識の地域的差異とその問題点・課題
- ・ 水文化と森林文化の融合による「森水文化」の基本的考え方
- ・ 水源地域の活性化をもたらす水源地域自身の「価値」
- ・ 「ツーリズム複合」による新しいライフスタイル創造への視点
- ・ 水文化と森林文化にあるべき「知」のセンスと「心(感性)」

2. 水文化と森林文化の融合の考え方

ここでは、意見交換会の議論にもとづき、森林文化の概念及び特徴について、また、水文化との関係について、さらに、水と人との関わりにおける問題点・課題について整理した。これらをふまえ、水文化と森林文化の融合のあり方について検討した。

(1) 森林文化の考え方と特徴

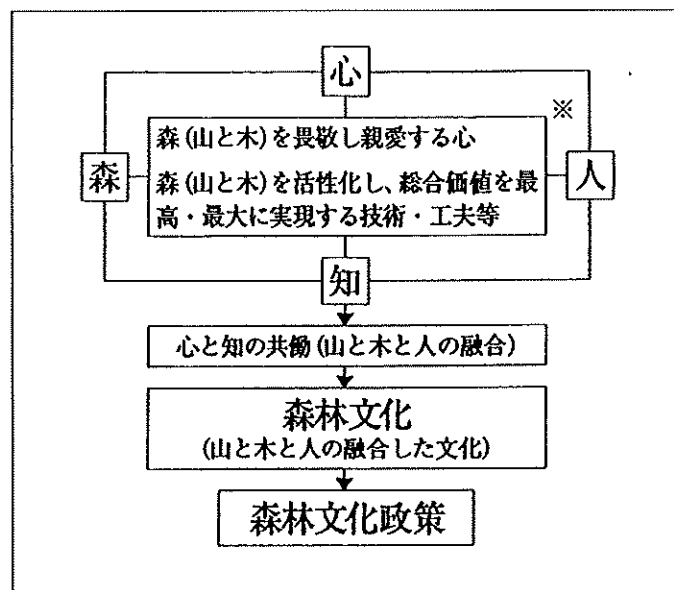
本調査は水文化を中心テーマとして進めてきたが、水文化と森林文化との融合のあり方を考えていくにあたり、森林文化の考え方や特徴を整理・把握する必要がある。

そこで、森林文化の概念と森林の機能面からみた特徴について以下のように整理した。

1) 森林文化は、森と人を結ぶ「知」と「心」の成果

広辞苑では文化とは、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果で、生活様式と内容を含む」と定義されている。

筒井教授によると、森林文化とは「人間が森林に手を加えて形成してきた物心両面の成果」であり、「森を畏敬し親愛する心」と「森を活性化して調和させ、その総合価値を最高・最大限に実現する技術・組織などの知恵」である（参照；図 3-1 森林文化社会の構図）。すなわち、森林文化は森と人を結ぶ「知」と「心」の成果である。



※《山》非生物（土・砂・水等）、《木》生物（木・草・鳥・獣等）
出典：水利科学 No275（第47巻 第6号）、筒井迪夫 2004

図 3-1 森林文化社会の構図

2) 林業と森林文化

わが国では、豊かな森林資源を生活の糧として発達してきた歴史的経緯があり、これが林業として定着し、今日に至っている。森に依存して生きる人々は、木を伐採して収益を確保する必要がある。一方、自分達の生活圏の安全確保のみならず生態系の秩序を維持していくためには、木を伐らずに豊かな自然を保持し、安全な森林環境を確保しなくてはならない。

人々が森とともに生きていくために、これら「経済生産機能」（伐る）と「公益保全機能」（伐らない）という、相反する2つの森林機能の調和を図っていくための「知恵（知）」と「心」が長い年月をかけて林業の発達とともに「森林文化」として育まれてきた。

しかしながら、近年、国産木材に対する需要の低迷などにより、わが国の林業は衰退の一途をたどり、全国的に森林の荒廃が問題となってきている。わが国の森林の約4割を占めるといわれている人工林はそのほとんどがスギ・ヒノキを中心とする用材林である。これらの豊富な森林資源の積極的な活用が期待される場所であるが、木材の質の問題、人工林の管理者サイドの人材不足、また、伐採や保育の作業を行う林業労働者の減少と高齢化という問題も大きい。

今後、わが国固有の森林文化を後世に残していくためには、森林の土砂流出の防止や環境保全といった公益的機能に注目するだけでなく、木材生産活動が持続可能であることが大きな条件となる。その際、多大なエネルギーとコストを要する輸出のための戦略を考えるのではなく、中山間地域などの生産地に近いところでの消費を前提とするしくみが求められる。その意味では、「森林所有者や森林管理を請け負う森林組合と住宅建材を必要とする消費者との間を近づけることによって林業を活性化しようとする動きがあることは注目される」¹。

(2) 水文化における意識変化の問題と課題

1) 水文化は水との関わりの結晶

森林文化は森と人との関わりの中で、森に手を加えていく過程において生み出された知恵や思想が文化として定着したものである。

一方、水文化は、水（水資源）を制する治水技術などの知恵に始まり、漁業や農業、伝統的な生産技術への応用、遊びといった直接的に水と関わる行為、さらに、水への畏敬の念から生まれた祭などの慣習や風景としての水景観など、間接的に関わる行為等、これらが総合的に地域に定着したものである。

¹ 住宅建材としての森林資源問題 伊藤 達夫（『協う』2004年2月号 視角 No.81）
<http://hai.seikyuu.ne.jp/home/kki/kanau/index.html>

序章 1. (1)で説明した水文化の概念を再度整理すると、以下のとおりである。

水文化の考え方

- 全国各地には個性的な水文化が数多くある。
- 水文化とは、水との関わり合いの中でもたらされた、「地域の風土に根ざした個性」や「そこに住む人々の歴史が育んだ水と親しむ文化」である。
- 水文化には、水に関わる「祭事・信仰」、「伝統工芸・伝統技術」、「生活風習」などがある。
- 近年、人と水との関わり方が変化してきており、より一層水との関係を深めていくことが課題である。

2) 変化する水への意識や関心

近年、地域における人々の水との関わり方や水に対する意識にはネガティブな変化が見られるようになってきているという。

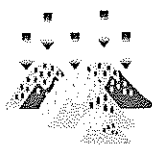

宮口教授の指摘によると、水文化は本来、それぞれの地域における水との関わり方や水に対する意識の多様さを映したものであにもかかわらず、水を狭い意味で限定的に捉えようとする画一的な傾向が見られるという。すなわち、河川や中・下流域にあるダムで貯められた水を指標とし、水をあたかも「塊」のように単純に捉えようとする姿勢である。例えば、下流域の住民の間で水といえば、飲料水として確保した水の「量」や「水質」に関心が集中する風潮があり、ここにもその影響は見られるという。

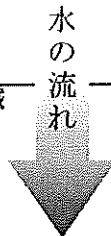
このような意識の変化は流域全体でみられ、水源地や上流域では、水は実態として認識する機会が少なく（見えない水）、逆に、中・下流域では河川やダムなど量として認識できるものの、水の持つ多様な付加価値や可能性について意識するという機会が少なくなっている。

今後の水文化のあり方を考えていくうえでは、画一化した水に対する意識を変えていく必要があり、上流から下流域に至るまでこれまで以上に水を幅広い意味での地域資源として捉え、水との関係回復を図りながらより一層深めていくかが課題である。

特に水源地では、水源としての価値を地元が認識し、森林文化との関わりの中、地域経済に資するような水資源の活用方法について知恵を絞っていく必要がある。まずは水源地と中・下流域で生活をしている人々が、地域の人々が地元で生活をしながら同時に森林及び水源を守っていけるようなしくみとして、環境保全や景観そのものを資源とする産業の創造など、地域活性化のための新たな取り組みが必要である。

表 3-1 一般的な水に対するイメージ（概念）

| 流域・位置 | | 一般的な水利用のイメージ | 性質 |
|---------|--|--|----------------------|
| 水源地・上流域 | 降雨  | 限定的な利用(飲料水など) (ダムがある場合、発電、農業用水等) | 見えない水 (実態を認識しにくい) |
| 中・下流域 | ダム・河川  | ○一般的利用方法 ダム・飲料水・レクリエーション等 ○歴史的利用方法 堰・水車・染色等 | 見える水 (量として認識可能) |



(3) 水文化と森林文化の融合による「森水文化」の基本的考え方

1) 水文化と森林文化の密接なつながり

森は水の母といわれるように、水源地の森は水を育むとともに人間社会に様々な恩恵をもたらしている。森林のもつ多様な機能の中で水と関係するものとしては、直接的な水源涵養機能だけでなく、洪水や土砂災害を防ぐといった機能を果たしており、これまで人々の安全な生活をも維持する役割を担ってきた（図 3-2 水源地域と森林の関係）。このことは、森林なくして水源地とそこに住む人々の生活が成立し得ないことを意味している。つまり、良好な森林環境の維持（森林文化）のうえに、水源地をはじめとする水資源とその恩恵に預かっている地域社会（水文化）が成り立っているわけである。

このように、水文化と森林文化の融合を検討するにあたっては、この「人と水源地と森」の密接な関係を理解したうえで検討していく必要がある。

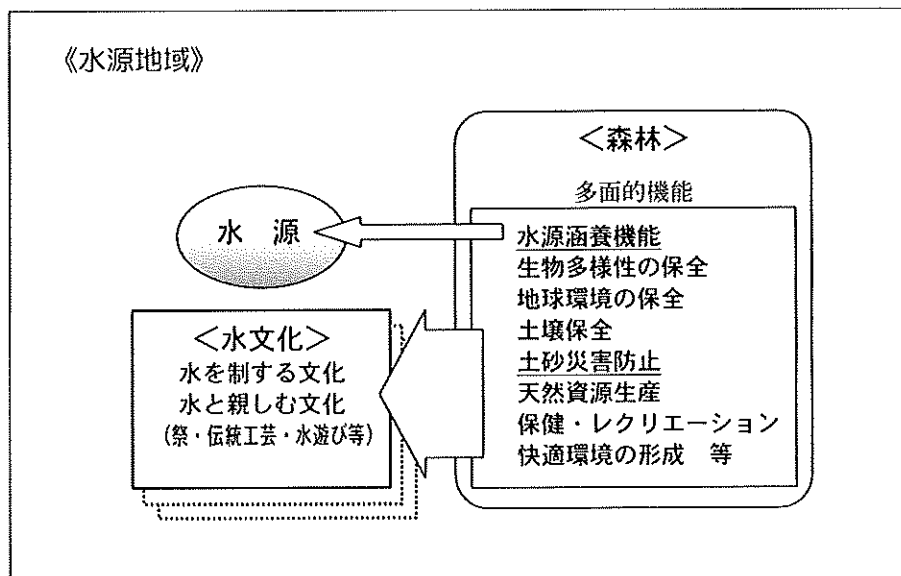


図 3-2 水源地域と森林の関係

2) 「森水文化」の基本的考え方

これまでの検討内容を整理すると、水文化と森林文化の関係は水と森の関係と同じく密接に連携しているため、2つの文化を合わせて考えていく必要がある。この水文化と森林文化の融合した形を「森水文化」と捉え、その基本的考え方を示すと図 3-3 森水文化の基本的考え方のおりである。

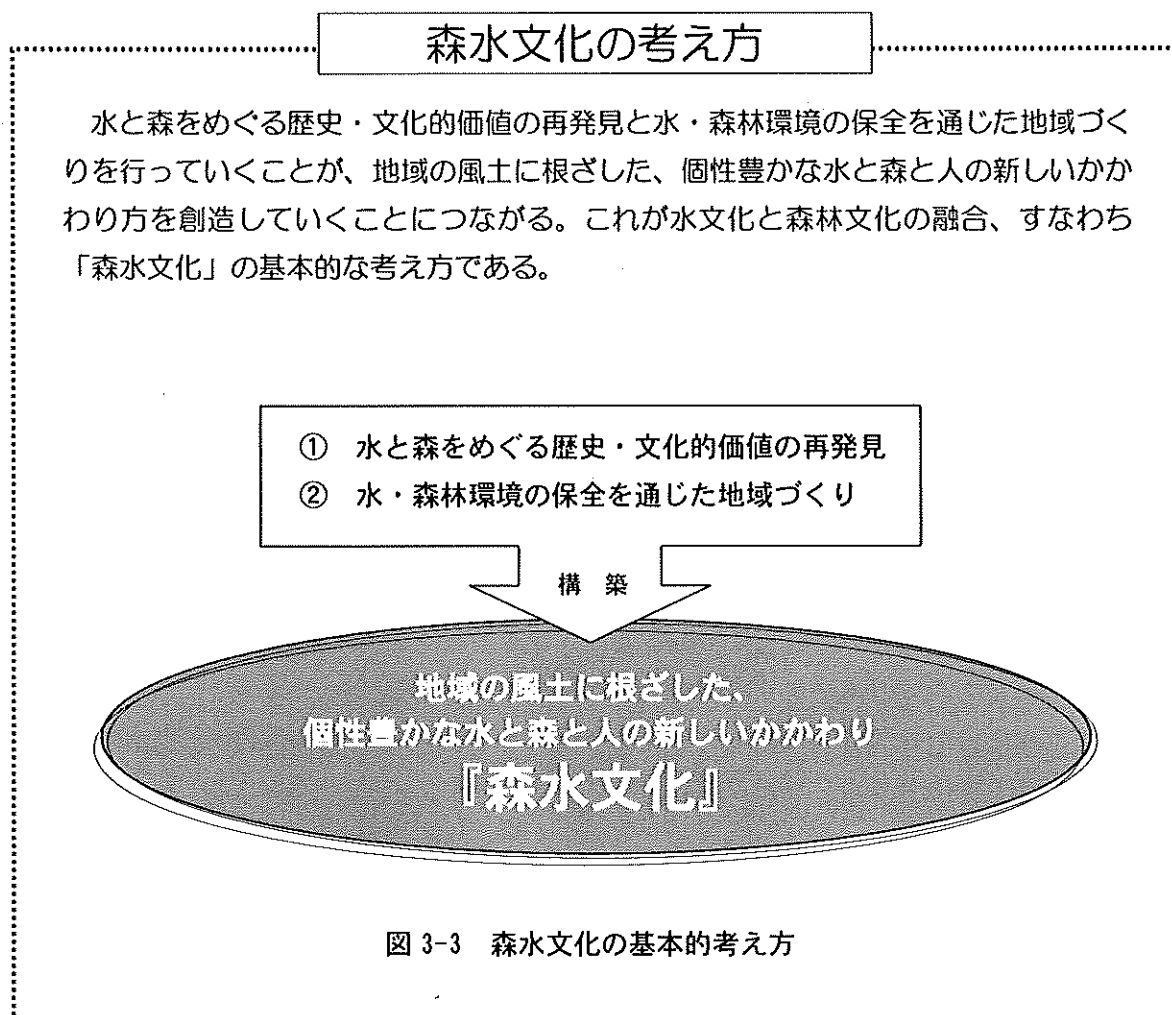


図 3-3 森水文化の基本的考え方

3 『森水文化』の創造に向けて

(1) 水と森をめぐる歴史・文化的価値の再発見 ～森水文化の創造へ～

1) 総合的な価値としての水源地域

水源地や上流域では、ダム建設・整備による集落の水没移転の直接影響から人口の大幅な現象が見られるケースが少なくない。しかしながら、過疎化への直接的原因の全てではないことを理解している人は少ない。むしろ、山村などの中山間地域とよばれる地域は、市場経済の枠組み（特にわが国のシステム）が要因として経済的に立ち行かなくなり、その結果、過疎化につながったことを地域の人々が十分理解する必要がある。

そのうえで、水源地は下流域への水の供給源であるという画一的な考え方を改め、水と森をめぐる歴史・文化的価値の再発見に取り組み、水源地域そのものの新たな価値として見出していくことが、結果として自分達の生活の糧にもつながる（⇒森水文化の創造）ことを地元にも広く認識してもらう必要がある。さらに、その価値を地域へ還元し、地域経済の活性化に発揮できるようなしくみを地域自らで考えていく必要がある。

2) 地域独自のライフスタイル

水源地域の価値を地元の収益につなげていくためには、水文化、森林文化として受け継がれてきた伝統文化を今の時代に合わせてカスタマイズしていく必要がある。そしてこれらを地域で活用していくには、今の時代にあった地元での「ライフスタイル（生き方）」を人々が新しく生み出していくことが重要であり、これが森水文化創造の基盤となっていくのである。

近年、各地で行われている道の駅などを拠点として展開する農産物直売事業は、生産者である地域住民の直接的な収益に結びつくため、短期的には有益であるものの、水源地域の水文化や森林文化として定着せず一過性に終わってしまう可能性もあるため、事業を考える際はより長期的な視点からも検討していくことが重要である。

(2) 水・森林環境の保全を通じた地域づくり

水文化や森林文化を守っていくには、水（川）や森の恵みを活かした産業を興すと同時に、水・森林環境の保全を通じた地域づくりを行っていくことでもある。そのためには、従来型の釣りやキノコ狩りといった観光誘致に見られる、形やモノとしての森林資源や水資源の活用だけではなく、さらなるプラスアルファの工夫が必要となってくる。

例えば、都会や他地域では味わえないオリジナルな森林・水体験や環境学習を体験してもらい、好奇心や優越感を満足させる取り組みなどである。このような仕掛けは、訪れた人々の水・森林環境保全への関心を高めるだけでなく、地域の自然環境と水文化・森林文化に対する総合的な認識・理解へとつながることになる。

また、地域を訪れた人の感性に直接訴えかける（水源地や森林の）「美」で稼ぐといった新たなアプローチなども視野に入れていくことなども考えられる。「森林美学」という学問が200年以上前からあるように、感性の結晶としての芸術という視点から森林や水源を位置

づけていくことも大切である。これを幅広に捉えるとツーリズムや森林ウォーキングなどで求められる森林の美しさや環境に感じ入ることによって得られる癒し効果へとつながっていく。これからの森林文化はこの方向性が主流となっていくものと考えられる。

(3) 地域の風土に根ざした、個性豊かな水と森と人の新しいかかわり方 ～新たなツーリズムへの転換～

地域における森林とそれが生み出す水資源の総合的な価値を地域住民が地域づくりへ活かし、森水文化として定着していくために、地元と都市住民との交流活動を基盤とした、新しいツーリズムの概念を導入する。具体的な内容は以下のとおりである。

1) 交流を基盤とする新たなツーリズムとは

水源地域における新しいライフスタイル（生き方）にとって、森と水源地域に住む人々と都会の人々との相互刺激のともなう交流活動が大変重要となってくる。この交流活動では、地域に価値を感じてくれる人に来てもらうための仕掛けやしぐみをいかにつくっていくかが重要なポイントとなる。今後、過疎地域が目指すべき交流の形とは、単なる従来型の観光事業ではなく、取り組みの中心となる「多様な価値観と多様な出会い」を結びつける新しい交流（ツーリズム）の形である。それは地域の人々が堂々と生きていけるような考え方につながる概念でなくてはならない。この新たなツーリズムは、過疎地域で「メシが食えること」と「自然との共生」が成り立っている状態を実現する事業である。

2) 交流の基本的考え方

交流とは、このツーリズムの担い手である地域住民が成長し経済的に地域で自立し、これが地域の新しいライフスタイル（生き方）として定着していくことが目標である（図 3-5 新たなツーリズムのしぐみ）。

交流事業の考え方の根底には、地域住民にとっては「当たり前のこと」や「めずらしくないモノ」、「恥ずかしいと感じていたこと」などの発見とその活用がある。つまり、都会の人々に意外にも喜んでもらえること（地元にとっては消極的材料）は何かを見つけて、加工し、積極的に商品化してセールスしていくことにある。したがって、都市部の人々を注意深く観察し、何が喜ばれているか、いち早く気づくことが大変重要である。これらの話題や資源は地域の身近なところで見つかるはずである。

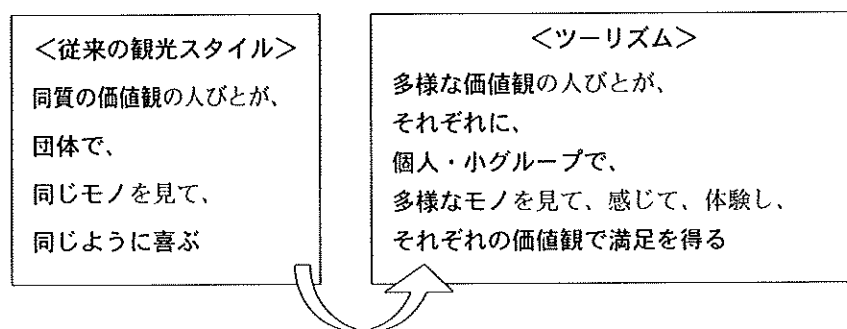


図 3-4 ツーリズムの考え方

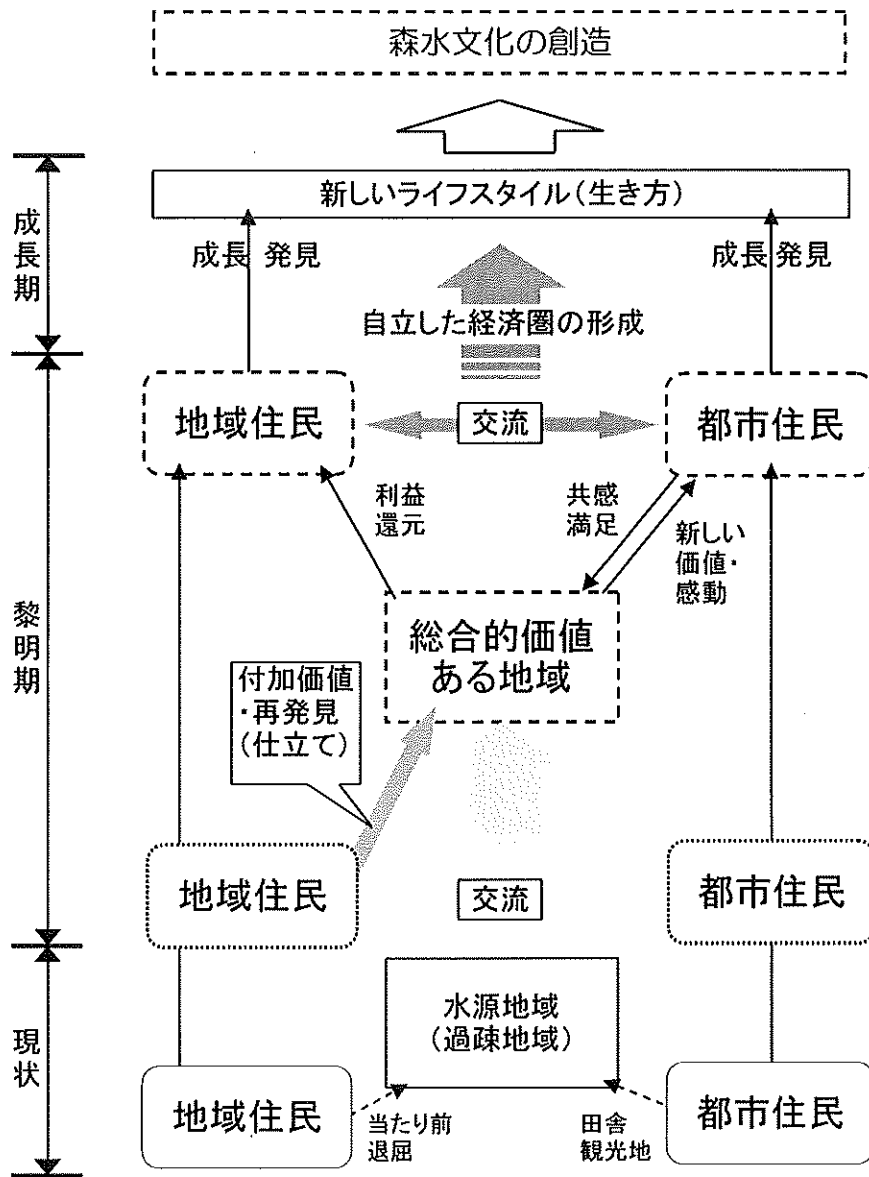


図 3-5 新たなツーリズムのしくみ

